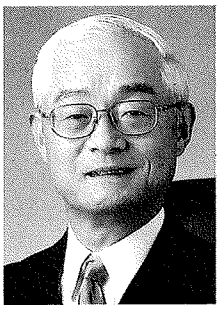

巻頭言

「リスクコミュニケーション」

農薬工業会　会長　**大内脩吉**

今年も春先からの天候不順が作物生育に異変をもたらしている。世界の雲の動きが瞬時に分かるまでに情報化が進んでいるが，地球環境はスポット的に変化するため，先の予測が見通せない面もある。世界的食料確保の必要性は言を待たないが，食の安全と安心は永遠のテーマであり科学的により詳細に根拠を明らかにしていくことが求められている。情報の共有化と意思疎通の意味合いとしてのコミニュケーションの必要性は高まっている。

リスクコミュニケーション(Risk Communication)とは『社会を取り巻くリスクに関する正確な情報を 行政・専門家・企業・市民などの利害関係者が共有し，相互に意思疎通を図ること』と定義されている。リスクを正しく認識して対処することが求められるが，農薬業界としても「農薬のリスクコミニケーション」という面では課題を抱えている。

農薬の研究開発，製造販売にかかわる者としては，農薬は安全な食の確保に必要な農業資材だとの使命をもって日夜努力している。より安全性の高い農薬の開発が指向され続けており，また実使用場面でも 農薬は使用基準を遵守して適切に使用することが求められている。

登録された農薬は正しく使えば安全である。また農産物の収穫量確保や生産者の労力軽減，流通価格安定化など 様々な点で使用者と消費者にとって共通の利益をもたらすものと認識している。

かたや一般消費者にとって，農薬は危ないものとの漠としたイメージ，不安感があるのも否定出来ない。理屈ではない。さらに言えば，有機栽培や無農薬栽培の農産物のほうが通常栽培よりも安全・安心，より美味しいというのが少なからぬ方の認識ではないだろうか。

農薬の安全性について，我々農薬業界は日々進歩する最先端の科学を駆使し，より安全な製品を指向して来た。また実際に安全である（＝正しく使えば危険ではない）ことの証明を地道に続けて来ている。一方で有機栽培・無農薬栽培と通常栽培の農産物についても多くの調査研究がなされており，安全性や味に有意な差はないとされている。

何の根拠もなく安全ですと言うのは論外である。しかし科学的データを列挙して証明を試みても，安心してもらうことが出来るのか？ どうすれば意思疎通できるのか？ ここで必要な考え方が，冒頭で紹介したリスクコミュニケーションである。

まず消費者が何に対して危険や不安を感じているのかをよく聴き取り，それらを一つずつ説明して理解を得る。消費者の『理解』が容易に得られない場合でも，相手者の不安を我々が“理解”することが，消費者の『納得』を得る最初の一歩であろう。知識や情報の不足により不安がられるのは仕方がないとの前提に立ち，それなら正しく理解出来るようにリスクの大きさ（モノサシ）に関しての情報提供をするのも有用と考えている。

農薬工業会では，活動の一環として効果的なリスクコミュニケーションを目指し，一般消費者の不安をなくす努力を継続している。このうち「農薬ゼミ」を先月までの6年間に全国28カ所で開催し（本部で6回，支部で22回），延べ4,700人の一般消費者の方々に参加を頂いた。また昨年より地方のテレビ局やラジオ，新聞，雑誌6誌等の企画番組や企画記事を活用した，いわゆる「パブリシティ事業」を併せて進めており，「講師派遣事業」も展開している。対象も消費者の方々だけではなく，教育関係者，メディア関係者，さらには農薬使用者や現場の指導者の方々に等にも拡大している。

皆様にも是非ご利用いただけると幸いである。